

いにしえの世界

—四街道市物井地区の発掘ものがたり—



千葉県では、年間450件ほどの発掘調査が行われ、房総各地の歴史と文化を伝える貴重な成果が数多く得られており、当財団の調査成果については、ホームページや遺跡発表会等で順次ご紹介してまいりました。

今回企画した展覧会は、四街道市物井地区における区画整理事業に伴う発掘調査の成果です。その一部は、すでに整理・研究作業を経て発掘調査報告書として公刊しており、その中から「いにしえの世界－四街道市物井地区の発掘ものがたり－」と題して、これまでの成果をご紹介します。

房総の一角に展開した、旧石器時代から中世の各時代にわたる多様な文化の様相を感じていただき、埋蔵文化財保護へのご理解をお願い申し上げます。

最後になりましたが、ご協力をいただきました関係機関並びに関係者の皆様に、心からお礼申し上げます。

平成25年7月27日

公益財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター長 加藤 修司

凡

例

- ①本書は、平成25年度物井地区展の展示解説図録です。
- ②展示資料及び本書掲載の写真や図の多くは千葉県教育委員会の提供ですが、以外の資料についてはキャプション及び本図録中に明記しました。
- ③本展示は、調査研究部長伊藤智樹・整理課長今泉 潔の総括のもと、主任上席文化財主事栗田則久が担当し、図録の執筆及び編集は栗田が行いました。

物井地区は、県北部を北上して印旛沼に注ぐ鹿島川左岸の台地上に位置します。現在の都市再生機構（UR）によるJR物井駅と千代田団地との間の約96ヘクタールという広大な面積の区画整理事業で、地区内の14遺跡が調査対象となりました。



物井地区の遺跡



旧石器時代

旧石器時代とは、今から1万年以上も前の氷河の時代に、今では絶滅してしまった動物（例えばナウマンゾウやオオツノジカ）などを狩猟したり、木の実などを採取して人々が暮らしていた時代です。

物井地区で人々の活動が見られるようになったのは、約3万5千年前から約1万年前までの最後の「氷期」にあたり、最も寒い時期は、年間平均気温が今より7℃以上も低かったといわれています。

旧石器時代の石器は関東ローム層中から発見されます。関東ローム層とは「第四紀更新世」の時代に古富士火山から関東平野に降り注いだ火山灰で、「赤土」とも呼ばれています。千葉県の新石器時代の石器は、関東ローム層最上部の立川ローム層から出土します。

物井地区では、旧石器時代の遺跡が多く調査されており、各時期の石器が出土していますが、特に立川ローム層のⅨ層及びⅩ層（最下層）からの石器が主体的である点が特徴的です。Ⅹ層から石器が発見された御山遺跡では、「環状ブロック」と呼ばれる石器群の分布が確認され、このタイプの出土状況を示すものとしては県内最古となる可能性があります。また小屋ノ内遺跡では、Ⅸ層から長径50m以上の環状ブロックが確認されており、出土した石器が県有形文化財に指定されている隣接する内黒田地区の池花南遺跡例より大きなブロックとなっています。



小屋ノ内遺跡の環状ブロック（Ⅸ層）

約3万2千年前頃の石器群の広がりです。中央に石器がほとんどない空間があり、その周囲に円形に石器群が分布しています。その様子から、「環状ブロック」と呼ばれており、このタイプの石器群は立川ローム層のⅨ層及びⅩ層から発見されます。

環状ブロックが調査された遺跡は、全国的には100か所以上確認されていますが、そのうちの半数は千葉県内からの例で、全国一を誇っています。



小屋ノ内遺跡の環状ブロックから出土した石器

出口・鐘塚遺跡では、総数2千点以上の石器等が出土しています。その中の2点の石製品は、上部を欠いているものの、欠損部に孔の痕跡があり、垂飾のようなものに使われたのかもしれない。



小屋ノ内遺跡の立川ローム層（Ⅲ層～Ⅹb層）



出口鐘塚遺跡Ⅸ層出土の石製品



縄文時代

この時代の物井地区は、早期から中期頃までは小さな集落が点在する程度ですが、早期後半の三角形を主体とする小形土偶が3点発見されており、当時の精神生活を知る上で重要な資料となっています。後期から晩期になると、集落規模は小さいものの、比較的豊富な遺物が出土しています。その中では、嶋越遺跡からこの時期の山形土偶やミミズク型土偶などが数多く見つかっています。



早期の小形土偶（小屋ノ内遺跡）

この3点の土偶は、早期前半の撚糸文系土器が集中して分布している場所であることから、これらの土器群に伴うものと考えられます。この時期の土偶は、県内でも10遺跡程度しか発見されていない貴重な資料です。



さまざまな土偶（嶋越遺跡）

嶋越遺跡では、縄文時代の遺構はほとんど見つかりませんが、東側の斜面から、後期から晩期にかけての100点以上の土偶片をはじめとした多量の遺物が出土しました。

当時、この斜面が廃棄場所として利用されていたのでしょう。



弥生時代

この時期の集落も縄文時代同様それほど多くありません。隣接する内黒田地区の池花南遺跡では弥生時代中期前半の土器が発見され、その後の後期の土器は物井地区でも出土していますが、人々の盛んな活動を示すものではありません。ただ、小屋ノ内遺跡からは後期の壺棺墓（再葬墓）が1基確認されています。この遺跡の東側に隣接する馬場NO.1遺跡では、方形周溝墓が存在しており、北方の墓制である再葬墓と西方の墓制である方形周溝墓が共存している状況が注目されます。



小屋ノ内遺跡の壺棺墓

この壺からは人骨等の埋葬を具体的に示す資料は発見されませんが、壺の頸部から上を意図的に打ち欠いて蓋として利用した可能性が高いことから、埋葬用の壺ではないかと考えられています。

このタイプの埋葬は、遺骸を一旦土葬し、その後、骨となった状態のものを再び壺に入れて埋葬することから、「再葬墓」とも呼ばれています。

方形周溝墓は、東海地方を起源とする墓で、西方の文化の影響を受けています。小屋ノ内遺跡東側の馬場NO.1遺跡（地区外）では8基確認されています。



馬場NO.1遺跡の方形周溝墓（四街道市教育委員会提供）



古墳時代—古墳—

四街道市内には、物井地区を中心とする物井古墳群（前方後円墳1基、帆立貝形古墳6基、円墳約30基）をはじめとして、古墳時代後期（約1,450年～1,400年前を中心）の古墳が100基以上も確認されています。物井地区では、人物埴輪や馬形埴輪などを出土した清水遺跡が注目されます。この人物埴輪は、腕が短く内湾し、上半身のみで足を表現しないなど、下総地域に広く分布する埴輪の特徴を有していることから、「下総型埴輪」と呼ばれています。四街道市内では唯一の埴輪をもつ古墳となりました。

また、御山遺跡の古墳の石棺からは、完全な形で金銅装の大刀が発見されました。墳丘は残っていませんでしたが、小規模な円墳にこのような優品が副葬されていたことは、物井古墳群の性格を考える上で重要な情報を提供しています。



清水遺跡S08号墳（6世紀後半）

物井古墳群で唯一埴輪が発見された径24m前後の小規模な円墳です。墳丘は残っていませんでしたが、周溝内から数多くの埴輪片が出土しました。



S08号墳出土人物埴輪

唯一ほぼ完形に復元されたのは写真右の1点のみですが、個体ごとの特徴を検討した結果、ほぼ13個体の人物埴輪が存在していることが明らかとなりました。この2個体の人物埴輪は、男子像の特徴である美豆良（みずら）を結っています。右の埴輪は、女子像と同様に胸に乳房を表現したと思われる二重の円が刻まれています。



清水遺跡S16号墳

墳丘長25mほどの小形前方後円墳です。墳丘と周溝の間のテラスから石材をすべて抜き取られた箱式石棺の跡が確認されました。報告では、盛土を積む際の地割線と土のう積みの痕跡が明らかにされ、古墳の築造法を具体的に示す資料として注目されています。



御山遺跡SX015号墳（6世紀末頃）

径23m前後の円墳の南側墳丘裾から発見された箱式石棺です。筑波石と呼ばれる絹雲母片岩を棺材として使用していました。内部には、成人4体分と小児2体分の人骨とともに金銅装大刀や勾玉などの装飾品、多数の鉄鏃などが副葬されていました。



金銅装頭椎大刀

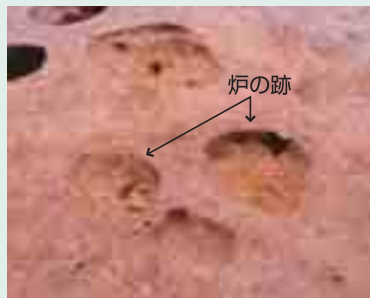
柄頭から鞘尻まで完全に残っていました。全長83cmと大型で、全体が金銅板で覆われ、点刻による唐草文や打ち出しによる珠文が描かれています。



古墳時代—集落—

古墳時代後期初め頃（約1,500年前）までは、弥生時代同様それほど大きな集落は営まれていませんでした。ただ、中期前半（約1,600年前）に鍛冶工房と思われる竪穴住居が小屋ノ内遺跡で見つかっています。同じ四街道市和良比の中山遺跡でも鍛冶に関連するような住居が存在し、印旛沼に注ぐ鹿島川の中流域に位置する四街道市域は、鉄器生産に適していたのかもしれません。

後期になると、竪穴住居数も増加する傾向にあります。地区西側の館ノ山遺跡や地区外の入ノ台遺跡が中心となります。鹿島川を間近に望む台地を当時の人々が居住域として選定したようです。



鍛冶の風景（四街道市教育委員会提供）

小屋ノ内遺跡では1軒の竪穴住居（一辺6mほどの大きさ）の床面に炉が4か所確認され、鎌や刀子などの鉄製品とともに、鍛冶の際に生じる不純物である鉄滓（てっさい）や送風に使われる高杯を転用した羽口（はぐち）などが出土しています。



奈良・平安時代

奈良・平安時代になると、小屋ノ内遺跡と稲荷塚遺跡を中心に多くの遺構が確認されています。両遺跡を合わせた竪穴住居数は500軒以上、掘立柱建物数は200棟ほどと、古墳時代以前の集落とは異なり、きわめて大規模な集落が展開しています。それまでほとんど土地利用が見られなかった広大な台地に大がかりな開発が及んでいったことがうかがわれます。

物井地区は、古代の下総国千葉郡物部郷にあたり、この両遺跡が郷の中心地として機能していたのでしょう。



房総三国と郡



『和名類聚抄』

律令体制を推進するのに重要なことの一つが地方の支配でした。そのために全国を五畿（大和国・山城国・河内国・和泉国・摂津国）と七道（東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道）という行政単位に分け、それぞれに属する国の下には郡・郷（里）が設定されました。

平安時代の中頃、10世紀に編纂された辞書の一つである『和名類聚抄』によると、当時の房総は上総・下総・安房の三国に分かれ、物井地区が含まれる物部郷は、下総国千葉郡にある7つの郷の中に記載されています。

小屋ノ内遺跡の中心的な建物群



奈良・平安時代になると、従来の竪穴住居に加え、掘立柱建物も増えてきます。この建物は、住居のほか、倉としても利用されています。小屋ノ内遺跡では、竪穴住居283軒に対して掘立柱建物142棟と高い比率で掘立柱建物が存在しており、その割合は県内でもトップクラスを誇っています。

稲荷塚遺跡出土の濃尾型甕

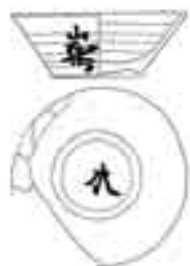


濃尾地方に特徴的な胴部にタタキを加えた甕です。濃尾地方と物井地域との交流を示す重要な土器です。

稲荷塚遺跡出土の三彩托



托（たく）とは物をのせる台で、主に仏具として使われました。当時貴重であった三彩陶器を入手できた階層が存在していたことを示しています。



小屋ノ内遺跡出土の墨書土器「山梨」

「山梨」は、古代の下総国千葉郡山梨郷という郷名で、現在も地名として残っています。



稲荷塚遺跡出土の墨書土器「物川」

「物川」の「物」は、千葉郡物部郷または氏族名の物部氏を指しているのではないのでしょうか。



小屋ノ内遺跡出土の墨書土器「厨」

「厨」は厨房施設を指しており、小屋ノ内遺跡の中にこのような施設があったのでしょうか。



中世

15世紀後半以降、この地域は争乱の絶えない地域となっています。16世紀初頭頃、南房総の里見方勢力が勢力を伸ばし、蕨（和良比）城を基地として本佐倉城方面を攻撃し、中頃には臼井城を拠点とした臼井氏に代わって千葉氏系の氏族が臼井氏系列の諸城を占有していったようです。末頃には豊臣方の関東攻撃があり、これに伴って当地域の城もやむなく無血開城となりました。

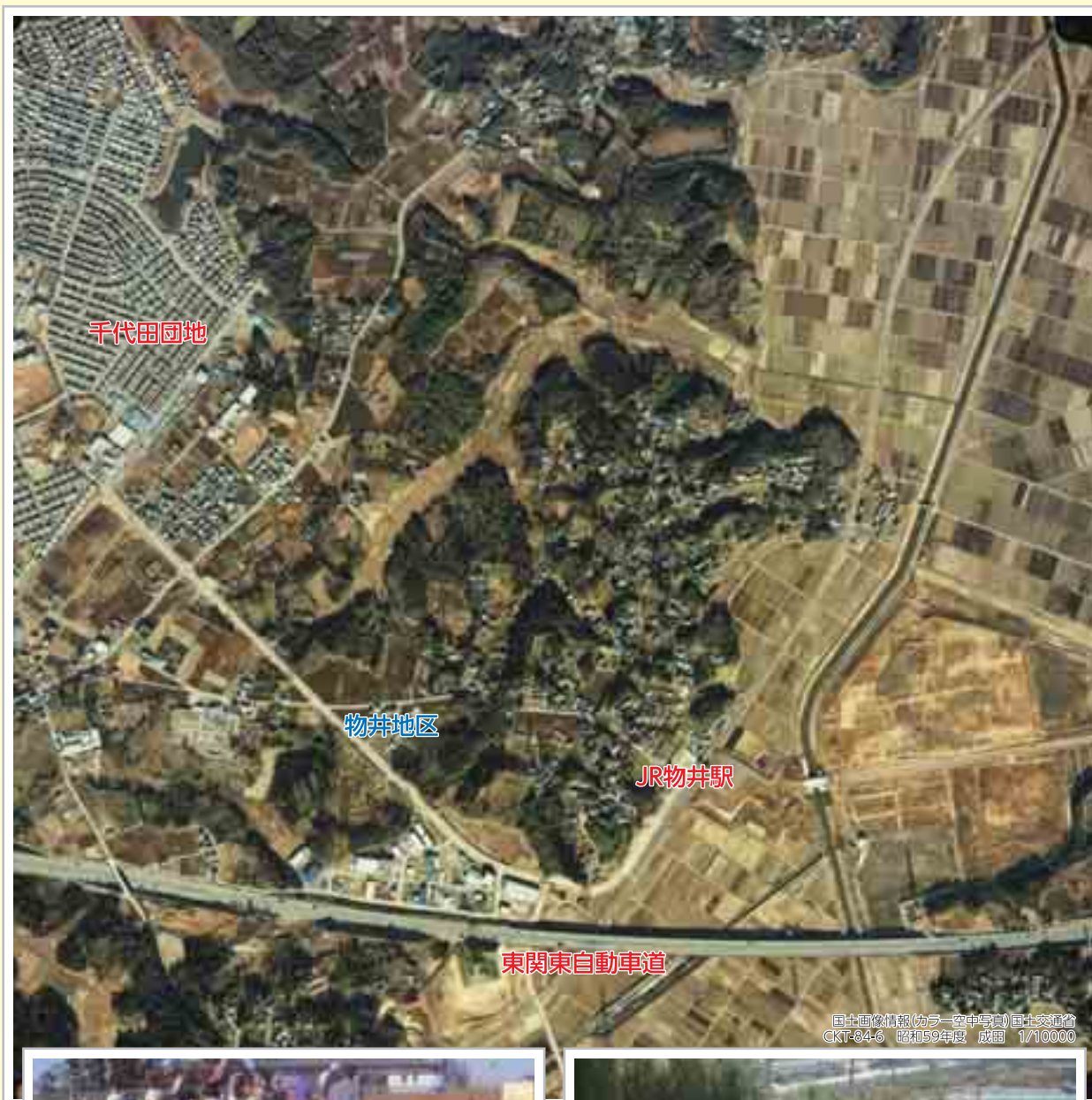
こうした動きの中で当地には多くの城や館・屋敷などが営まれています。その背景には、谷津を生産基盤とした地侍層が多く展開していたことや千葉氏重臣の原氏が拠点としていた生実城と臼井城を結ぶ要所に位置していたことなどが要因となっていたと考えられます。

北ノ作遺跡



重さ94.86gで、当時の重さの単位の約2両に相当します。

館ノ山遺跡出土の銅製錘



清水遺跡の見学会



嶋越遺跡の発掘体験（四街道中学校）

千葉県立房総のむら

印旛郡栄町龍角寺1028 / ☎0476-95-3333

平成25年7月27日(土)～9月23日(月・祝)

四街道市役所第二庁舎市民ギャラリー

四街道市鹿渡2001-10 / ☎043-424-8934

平成26年1月28日(火)～2月9日(日)

- 発行日：平成25年7月26日
- 編集・発行：公益財団法人千葉県教育振興財団 〒284-0003 四街道市鹿渡809番地の2
- 印刷：株式会社ニッセイアド